

# PROJECT in SFC

## 第1回 テイクオフラーー 2006

今号から始まる新連載「PROJECT in SFC」では、SFC生が立ち上げたプロジェクトとその達成に向けて挑戦し続ける学生たちの活動を伝えていく。第1回目となる今回は、2006年3月に開催された「せい の まさとテイクオフラーー 2006」の代表を務めた情野誠人さん（2006年3月環境情報学部卒業）に話を聞いた。

「うれしかったね。終わつたときはそれこそ最高の気分だったよ。SFCは生で良かったと思った瞬間だった。もう、胸がいっぱいで言葉にならなかつたよ。」

そう語るのは、テイクオフラーー 2006の代表を務めた情野誠人さんだ。テイクオフラーーとは、大学生活を共に過ごした仲間と卒業を祝うパーティーであり、第1期生卒業時から続いていた。しかし、2004年度は後継者がいなかつたため、開催されなかつた。そこで、情野さんがプロジェクトチームを立ち上げ、復活させた。それが2005年度の“THANK”をテーマにした、船上パーティーである。このパーティーには、学生はもちろんのこと、学生の両親や、教員たちも参加した。船上には、大音量の音楽にのつて踊る賑やかなスペースもあれば、会話を楽しめるような静かなスペースもあり、参加者は思い思いの楽しみ方で時間を過ごすことができた。

参加したすべての人が楽しめるような場にするために、情野さんが心がけていることがある。自分だったらどのようないきつきかけは1年生のとき。先輩たちがテイクオフラーーで盛り上がりつていけるを見て、自分たちも4年生になつたら必ずやろうと心に決めた。しかし、情野さんがテイクオフラーーに特別な想いをかけた理由はそれだけではなかつた。もともと情野さんは、イベント作りにどれだけ多くの人が関われるかということに重点をおいていた。「10人で100点満点のイベントを作るよりも、80人で50点のイベントを作れたほうが成功だと思っていたんだよね」。

しかし、徐々にそんなやり方に疑問を

さまざまな参加者の立場に立つて考えるのだ。そうした想像をもとに、一つ一つのプロセスを頭のなかに描いていくのだという。「俺、テストとかでも、この日までにこれを終わらせて、何日前までにはあれができるって、といふふうに逆算して考えるタイプなの。プロセスが見えていないまま進めて絶対に失敗すると思うから」。そうして頭のなかに描かれたプロセスどおり、準備は順調に進められていつた。当日は270人のぼる参加者が集まり、大盛況のもとテイクオフラーーは幕を開じた。



情野誠人（せいの・まさと）  
2006年3月環境情報学部卒業  
学部1年生のときに、ドミノ倒し  
大学日本記録に挑戦し、11万4  
000個を並べ見事記録を達成。  
秋祭実行委員企画局長としてさま  
ざな企画、イベントに携わった。  
現在はフジテレビに就職し多忙の  
日々を送る。

感じ始める。大人数に関わってもらえただけで自分は満足なのか、と。全員の意見をまとめて折り合いをつけようとすると、妥協点に落ち着いてしまう。全員の妥協点を探していくは平均的なイベントしか作れない。自分にとつてのイベントとは、成功とは何だろう。考え続けてたどり着いたのがテイクオフフライーだった。前年度開催されなかつたため、すべてが一からだ。まずメンバーを集めるにあたつて気心知れた仲間に声をかけた。「何が俺らの成功なんかを話すことから始めたね」。それぞれが自分にとつての成功を明確にイメージできなければ、面白いイベントは作れない。そう考えた情野さんは、最終的には28人となつたメンバー一人ひとりに、お前にとつての成功は何かと繰り返し問い合わせたといふ。同じことを何度も繰り返し聞くもんだからメンバーはうんざりしていたけど、この問いかけが自分らしさだから譲れなかつたと情野さんは笑う。

もう一つ、情野さんらしいのがリーダーシップの取り方である。メンバーが選択したことは、たとえ失敗するこどが目に見えているような提案でも、絶対に最後までやらせてみる。決してメンバーを自分の枠に押し込めない。トップが絶対的な存在になつてしまふと、必然的に下はトップにふられた仕事を言われたとおりにするだけの駒になつてしまふ。それが嫌つたと情野さんは言う。「社会に出たらそれは一つの考え方かもしれないけど、俺らは学生だったからさ。みんな同じ立場のはずなのに何で別のメンバーの指図のもとで動かぬきやいけないんだろうって思つわけ。誰だつて一つのプロジェクトに参加したら、どうすれば成功するだろうってまず自分で考える。言わされたとおりに仕事をするだけじゃ面白くないでしょ」。実際に失敗したとき、ふざけるなどメンバーを罵倒することは誰にでもできる。そうではなく、メンバーがミスをしたときのために解決

策を用意しておき、失敗が次に生きるようにお口にするのが代表の仕事だというのだ。そして、自分だけですべてが何とかなると天狗になつてはだめだと情野さんは釘をさす。人間は完璧ではない。自分の考えに固執しすぎれば、自己満足のイベントで終わつてしまふこともある。いろいろ人の意見を聞き、視野を広く保つことが必要である。

近年のSFCにおける学生イベントの中心にはほとんど必ずと言つていいほど、情野さんの姿があつた。そんな情野さんにとってテイクオフフライーは、大学生活4年間の集大成だったと言つても過言ではない。SFCで同じ時間過ごし、お互いを熟知していたからこそ生まれたメンバー同士の結束力。さまざまなイベント企画をとおして培つた経験や人脈、代表としてのリーダーシップ能力。そして、4年間かけて得た大學側からの信頼。「1年のころは大学側にいつも怒られていたよ。いいかげ

んな企画書ばかり出して、絶対にできないだろうとか、そんなことされたら困るとか言われたりしてさ。でも、このテイクオフフライーでは大学側も協力してくれたんだよ。今までやつてきたことを認めてもらえたんだと思つたら、本当にうれしかつた」。多くの失敗や挫折を経験して、SFCで過ごした4年間のファイナーレを船上で迎えた情野さんを待つていたのは、想いを形にした達成感だった。

## ■高校時代以来の、ドイツへの憧れ

——ドイツ語を履修しようと思ったきっかけは？

AO入試の志望理由書にも書いたくらい、もともと私は環境問題にたいへん興味を持っていたんです。高校生のときに『ドイツを変えた10人の環境バイオニア』という本を読み、ドイツの環境政策はこんなにも進んでいるのかと感動して、漠然とドイツに憧れを抱くようになりました。

だから、大学に入ったらぜひドイツ語を勉強してみたいと思っていたんです。

入学後2学期目、1年生の春学期から1年半インテンシブを受講し、その後に海外研修に参加しました。2005年度の秋学期以来は、スクリュ科目とコンテンツ科目を受講しています。

### ■実践と直結する授業スタイル

——ドイツ語のカリキュラムや教材の良い点を教えてください。

授業ではドイツ語研究室で独自に製作したModelleという教材を使っています。Modelleには教科書だけでなくビデオ教材もあり、それはSFCを舞台にして撮影されているんです。そのぶん実際にSFCに通う私たちにはわかりやすく、実際に

日常会話で使えるドイツ語を、例文を踏まえて勉強できるので、本当にModelleは良い教材だと思いますね。

またインテンシブⅡ期の、ドレスデン工科大学との合同授業はとても印象に残っています。カメラとマイクを使った、メッセージジャーを通してのライブチャットで、向こうの学生と毎回特定のテーマについて会話を聞いて理解し、それに対してきたら意味が通じるように返事をする、その実践的なやりとりのなかで聞き取りや発音の練習ができました。

——海外研修ではどこに行きましたか？

旧東ドイツのライブチャヒに行きました。私がドイツに留学したとき、日本から来ている学生は文学部ドイツ語学科の学生ばかりでした。でも、その子達と比べても一番しゃべれるのは私だったので、「よくしゃべれるね、ドイツ語科なの？」としばしば聞かれました。そのとき、しゃべることに恐怖感を持たず、とりあえず話してみると、その姿勢がSFCの授業を通して身についていたことを実感しました。SFCのドイツ語クラスでは間違えることが全然恐くなかった。SFCでドイツ語が身につく機会も多いので、誰が発言してもいいという空気があり、それが学習にも良い影響を与えていましたね。

——スキルの授業はどのような内容ですか？

今期はスキル科目を2コマ受講しています。一つは文法を中心の授業です。インテンシブⅢ期の授業では口頭のコミュニケーションを中心に構成されているのですが、そこから先の中級レベルでは、アカデミックライティングの能力が必要となってしまいます。だから最近では、言いたいことを正しく相手にわかつてもらうために、文法の基礎を固めることが大変重要な感じになりました。

もう一つは、ドイツ語でプレゼンテーションをする授業です。ゼミをドイツ語でやれるようになる、とい



「ライブチャヒにて、サマーコースの友人と」

# 世界への扉 —SFC外国語教育の魅力

第1回

## 熱意ある授業で身につく、コミュニケーションのドイツ語

SFCでは、未知の世界へのパスポートとなる外国語を学ぶために、体系的なカリキュラム、確実にスキルを磨く独自の教材、多様な授業形式などが、学生の意欲的な学習を支えている。今号からの新連載「世界への扉」では、外国語担当教員とSFCで外国語を学ぶ学生の双方に焦点を当て、言語を学ぶ意義と楽しさをお伝えする。第1回目はドイツ語をとりあげ、総合政策学部3年の鹿久保翼さんへのインタビューを通して、そのユニークな面白さに迫る。また、平高史也総合政策学部教授による寄稿も併せてお届けする。

うのがこの授業の主旨なので、自分の考えや思っていることをドイツ語でアカデミックに伝える学習をしています。

### ■ドイツを通して学ぶ都市計画

—今履修しているコンテンツはどんな授業ですか？

ズサンネ・エルファディング先生（総合政策学部非常勤講師）の世界遺産の授業です。エルファディング先生は都市計画が専門で、今期のテーマは鎌倉市を世界遺産に登録する可能性についてです。世界遺産という視点から町全体を見てみようという授業なんですが、私は都市計画に興味を持っているので、とても面白く受講しています。今回は実際に鎌倉でフィールドワークを行ない、市役所の方にお話を聞いたらします。語学の授業なんですけど、あくまでコンテンツなので、フィールドワークなども行なっている、ということが特徴ですね。

—今年留学されるそうですね。

はい、交換留学で9月から1年間ベルリン自由大学に行きます。そこで、都市計画についての勉強を続けるつもりです。私は今、古いものと新しいものとをうまく融合させた町づくりにとても興味を持つっています。

そして、現地で学ぶことによってドイツの優れたものを日本に取り入れて、日本をより良くしたいと考えているんです。ドイツは町並みをとても大切に保存する国なのですが、その町をじかに見ながら勉強して、そこから日本における都市計画について考えることができればと思っています。

### ■先生方の熱意を感じる授業

—ドイツ語の授業の最大の魅力はどこにあると思いますか？

授業では、学生にドイツ語をしゃべれるようになつてほしいという先生方の熱意をいつも感じます。先生方は学生がどれだけ食らいついでても、絶対に応えてくれる。そういう熱意ある授業を受けられることは大きな魅力だと思います。

みなさんも、ぜひドイツ語の魅力にはまってください。

総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員  
平高史也

外国语學習のおもしろさは、外国语に専門として取り組むだけでなく、別の専門領域を切り拓くためのツールとして身につけています。SFCのドイツ語では後者に重点を置いているためか、あるいは、総合政策、環境情報という学部が、従来はない学問領域を開拓する実験の場だから、人間工学、モダンアート、デザイン、自動車産業、製薬業界、異文化間コミュニケーションなど、既存の学部とは少し異なる領域で、英語やドイツ語、それに優れた情報処理能力を活かして活躍している卒業生が多い。そういう人材を育成するために、ドイツ語研究室では海外研修を軸としてカリキュラムを構成している。SFCや日本をフィールドにした、入門の段階から擬似ドイツを体験する段階までをカバーするインテンシブ・コースやベーシック・コース、自分で選んだ研修先で生のドイツ語圏を楽しむ海外研修、そして、現地で得た問題意識を専門の領域で研ぎ澄まし、深めていくスキルやコンテンツの授業。今後もこの教育をさらにレベルアップして進めていけば、日本ではとかく看過されがちなヨーロッパへの視点を備えた若者が、より多く巣立っていくにちがいない。

星の数ほどある書籍のなかから、本当に価値ある本を見つけるのは容易いことではない。しかし誰にでも、忘れるがたいほどに深い感動を覚えたお気に入りの本が、きっとあるはずだ。この連載では、それぞれの道で活躍しているSFCの教員が、学生へのメッセージというかたちで、忘れぬ本を語り、「私の推薦図書」とする。今号に登場するのは門崎敬一総合政策学部特別招聘教授。推薦図書はドストエフスキイ『カラマゾフの兄弟』と、埴谷雄高『死霊』である。

## 私の推薦図書

今　　時代なら笑われるだろう  
　　が、1970年に大学に入  
　　学した当時、私は「インテ  
　　リゲンツィア」（なんたる、古色蒼  
　　然）の一員になるのだという気概  
　　をもっていた、ような気がする。  
　　いわゆる「知識人」に仲間入りす  
　　るために大学へ来たと思っていた。  
　　しかし、地方の小さな町から勇ん  
　　で東京に出てみると、同世代の者  
　　たちの3割くらいは「知識人は卑  
　　怯者だ！」書を捨てて、街へ出よう！  
　　と叫び、大学は騒然となっていた。  
　　乗り遅れまいとした私は街へ出よ  
　　うとしたが、足がすくんだ。「世界  
　　は間違っている。何とかしなけれ  
　　ばならない」というのが、その3  
　　割の者たちの気持だった。私も同  
　　意見だった。しかし、世界と自分  
　　をどのように結びつけるべきなのか、  
　　よく分からなかった。

30数年も経つと、その頃の悩み  
　　の具体的な内容はもはや思い出せ  
　　ない。しかし夢中になつて読んだ  
　　本から推察できる。ドストエフス  
　　キイの『カラマゾフの兄弟』は上  
　　京の際に父の本棚からこつそり持  
　　ちだしたものだ（中央公論社「世  
　　界の文学」シリーズ17・18巻、  
　　1966年）。埴谷雄高の『死霊』は、  
　　途中の章までを高校時代に何か文  
　　芸誌で読んでいたと記憶するが、71  
　　年に「埴谷雄高作品集」（河出書房  
　　新社）が出て、当時発表されてい  
　　た3章分を読んだ。

今

　　時代なら笑われるだろう  
　　が、1970年に大学に入  
　　学した当時、私は「インテ  
　　リゲンツィア」（なんたる、古色蒼  
　　然）の一員になるのだという気概  
　　をもっていた、ような気がする。  
　　いわゆる「知識人」に仲間入りす  
　　るために大学へ来たと思っていた。  
　　しかし、地方の小さな町から勇ん  
　　で東京に出てみると、同世代の者  
　　たちの3割くらいは「知識人は卑  
　　怯者だ！」書を捨てて、街へ出よう！  
　　と叫び、大学は騒然となっていた。  
　　乗り遅れまいとした私は街へ出よ  
　　うとしたが、足がすくんだ。「世界  
　　は間違っている。何とかしなけれ  
　　ばならない」というのが、その3  
　　割の者たちの気持だった。私も同  
　　意見だった。しかし、世界と自分  
　　をどのように結びつけるべきなのか、  
　　よく分からなかった。

30数年も経つと、その頃の悩み  
　　の具体的な内容はもはや思い出せ  
　　ない。しかし夢中になつて読んだ  
　　本から推察できる。ドストエフス  
　　キイの『カラマゾフの兄弟』は上  
　　京の際に父の本棚からこつそり持  
　　ちだしたものだ（中央公論社「世  
　　界の文学」シリーズ17・18巻、  
　　1966年）。埴谷雄高の『死霊』は、  
　　途中の章までを高校時代に何か文  
　　芸誌で読んでいたと記憶するが、71  
　　年に「埴谷雄高作品集」（河出書房  
　　新社）が出て、当時発表されてい  
　　た3章分を読んだ。

『カラマゾフ』は悪徳と淫蕩の権  
　　化のような父親フョードル、粗  
　　暴だけどどこか純情な長兄ド  
　　ミートリイ、徹底した無神  
　　論者でインテリゲンツィア  
　　の次兄イワン、清純で信  
　　仰心篤い末弟アリヨーシャ  
　　のカラマゾフ一家を中心として展開する。物語の圧巻は、イワンがアリヨーシャに語つて聞かせる自作の劇詩「大審問官」の章だ。宗教裁判が吹き荒れる16世紀のセビリアにイエスが現れるが、大審問官はイエスと知りつつ捕らえて牢獄に繋ぐ。それは、なぜか。大審問官が無言のイエスに向かつて理路整然と述べる理屈に、当時の私は深く同意した。

しかし、もっと共感したのは、劇詩「大審問官」を語る前にイワンが吐露する、神への拒否の心情だ。イワンは世界中にはびこる幼児虐待（何という現代的テーマ）の例をアリヨーシャにこれでもかと語る。キリスト教は、やがて神が降臨して大調和、ハーモニーが訪れて、子どもも虐待者を赦し互いに抱擁し合うという。イワンは言い放つ、人類に対する愛ゆえに欲しくないのだ。僕はむしろ恨みをはらすとのない苦しみとともにとどまりたい。たとい僕が間違つていようとも、むしろ僕は恨みをはらすこ



ドストエフスキイ  
『カラマゾフの兄弟』  
埴谷雄高『死霊』



ドストエフスキイ『カラマゾフの兄弟』池田健太郎訳、中央公論社  
(世界の文学シリーズ17・18巻)、1966年

→現在入手しやすいのは、新潮文庫『カラマゾフの兄弟』(上・中・下、原卓也訳)

塙谷雄高『死靈』河出書房新社(塙谷雄高作品集1)、1971年

→現在入手しやすいのは、講談社文芸文庫『死靈』(I・II・III)

とのない苦しみと、いやされぬ怒りを抱いたままでいようと思う。(中略) 反逆では人は生きてゆけない。だが、僕は生きてゆきたい。」もちろんこれは幼児虐待がテーマの物語ではない。神と人間の問題、あるいは『カラマゾフ』が出版された19世紀末のロシアの社会状況を念頭に置くなら、ツアーリ專制下のロシアにおける宗教的救済と政治的救済の問題を扱っている。20歳の私は、このイワンと大審問官の設問のキーワードを「政治」「正義」「個人」「社会」「現実」などと読み替えていたと思う。

いっぽう、塙谷雄高の『死靈』は三輪四兄弟——高志、与志、矢場徹吾、首猛夫を中心にして、自己意識、社会、存在、無、宇宙などをめぐって延々と対話が繰り広げられる小説だ。四兄弟の中では私は首猛夫の言動にいちばん注目していたと思う。彼の「ふむ、俺自身は、認容せねばならぬものも、決して認容しないぜ。それが俺の方式で——俺が嫌いなのは、必然ということなんだ!」という言葉を、イワンの言葉と同じ文脈で読んでいた。

もちろんこれは幼児虐待がテーマの物語ではない。神と人間の問題、あるいは『カラマゾフ』が出版された19世紀末のロシアの社会状況を念頭に置くなら、ツアーリ專制下のロシアにおける宗教的救済と政治的救済の問題を扱っている。20歳の私は、このイワンと大審問官の設問のキーワードを「政治」「正義」「個人」「社会」「現実」などと読み替えていたと思う。

いっぽう、塙谷雄高の『死靈』は三輪四兄弟——高志、与志、矢場徹吾、首猛夫を中心にして、自己意識、社会、存在、無、宇宙などをめぐって延々と対話が繰り広げられる小説だ。四兄弟の中では私は首猛夫の言動にいちばん注目していたと思う。彼の「ふむ、俺自身は、認容せねばならぬものも、決して認容しないぜ。それが俺の方式で——俺が嫌いなのは、必然のことなんだ!」という言葉を、イワンの言葉と同じ文脈で読んでいた。

もちろんこれは幼児虐待がテーマの物語ではない。神と人間の問題、あるいは『カラマゾフ』が出版された19世紀末のロシアの社会状況を念頭に置くなら、ツアーリ專制下のロシアにおける宗教的救済と政治的救済の問題を扱っている。20歳の私は、このイワンと大審問官の設問のキーワードを「政治」「正義」「個人」「社会」「現実」などと読み替えていたと思う。

さて、解答は得られたか? 私は大学卒業後、出版社に入り編集者となつて25年以上にわたり書籍と雑誌を作り続けた。街へ出て、書を作る生活を送ったわけだ。世界と自分を結びつけるためにどうすべきかという解答は、本の中につたともいえるが、より正確に言うなら、本を作る——文章を読む。書く、人の文章に注文をつける、人と交流する、労働する、という過程の中にあつたような気がする。でもまだ、解答に少し近づいただけのようだ。



門崎敬一 (かどさき・けいいち)

総合政策学部特別招聘教授。

専門は出版編集、雑誌メディア論。現役の編集者でもあり、平凡社『太陽』元編集長、小学館『和樂』元エグゼクティブ・エディター。「メディア・リテラシー A」などの科目を担当している。

2006年4月、メディアセンターが改装され新しいスタートをきった。

#### ■改装の秘密

学生から「メディア」の愛称で親しまれ、SFCのシンボルの一つともいえる湘南藤沢メディアセンター。課題のため、グループワークのため、次授業までの空き時間を過ごすためとさまざまな用途で利用されている。しかし、私たちは本当にメディアセンターを最大限に活用できているだろうか？ 今号のSFC検証では、今よりも何倍にも活用すべく、メディアセンターの知られざる魅力に迫つていきたい。

そもそもなぜ、今回の改装は行なわれたのか。湘南藤沢メディアセンター事務長の木下和彦さんに尋ねたところ、いちばんの理由は、改装前のメディアセンターが時代の流れにそぐわなくなってしまったことだとう。たとえば設立当初、鴨池側のオープンスペースで語学の授業が行なわれ、テーブル一台につきデスクトップのパソコンとカセットディスクがそれぞれ配置されていたのだが、それらはのちに撤去された。というのも、学生が各自ノート型パソコンを所有するようになり、また無線LANが普及していくなかで、それらの必要性が少しづつ薄れていったからだ。しかし、机の配置やイスなどは以前のままであった。「そのための配置やイスが使いづらくなつてきて、思い切った改装が必要となりました。今後を見据えて、学生のみなさんにとって、もつと使いやすい環境を作ろうというわけです。学生が自分で揃えることが難しい機材を用意することと、学生が自分のパソコンを使いやすい環境を作ること。この二つのバランスをいかにしてとするかが重要だと考えています」と木下さんは語る。

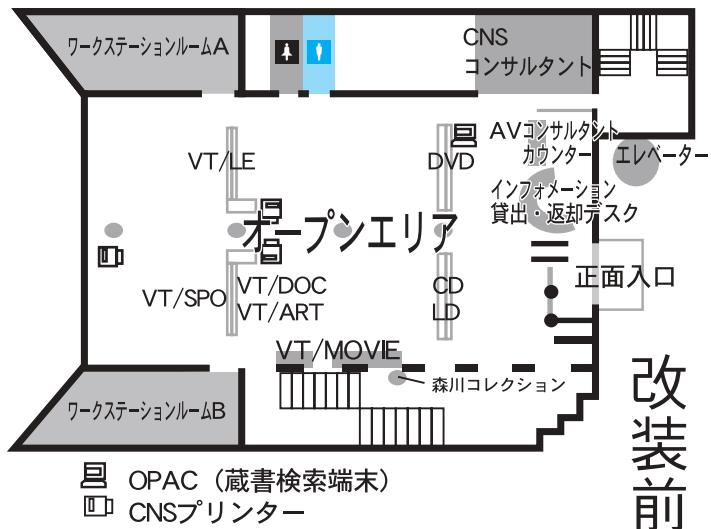
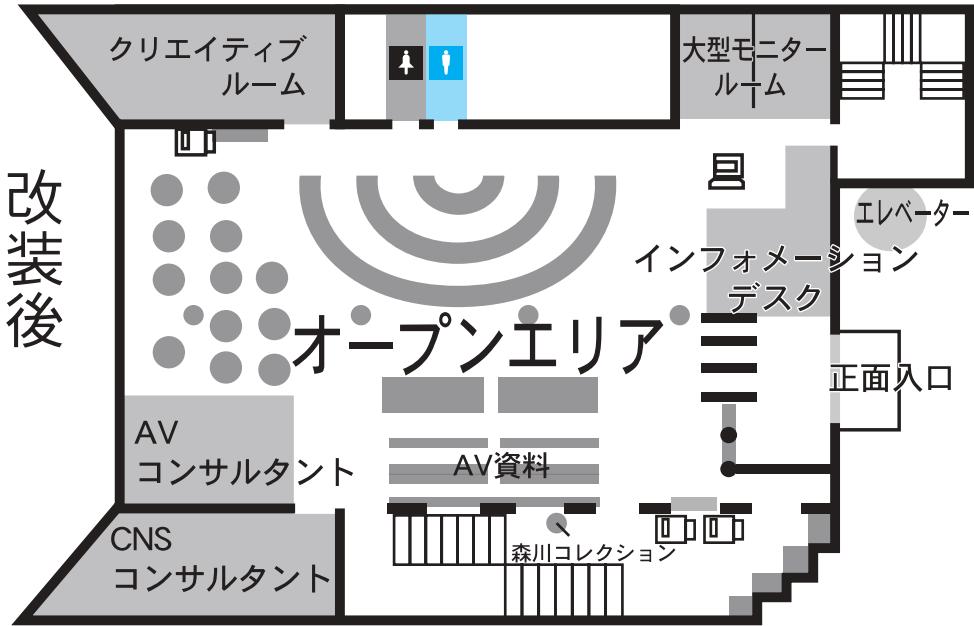
# SFC検証

File 08：知られざる「メディア」の魅力

メディアセンターは蔵書を保管し、利用者に貸し出しする「従来型の図

#### ■幅広い研究領域に応えるデータベースシステム

SFCにあるデータベースの扱う領域の一例として、一般的なものとしては雑誌や新聞の記事の検索データベース、専門的なものとしては判例検索のデータベースなどが挙げられる。たとえば、「国際法」の授業を担当する青木節子総合政策学部教授が薦める、国際法に関するデータ



ベースLexis.comだ。「JISはインターネット方式で利用が簡単ですし、メディアセンター経由で「Lexis社にお願いすると会社の人が来てくれて、データベースの使い方を教えてくれるサービスもあるから便利ですよ」と青木教授は語る。

データベースの使い方さえ理解しないれば、必要なときに欲しい資料を探して調べられるのだから活用しない手はない。「でも、使い方がよくわからない」という学生にぜひ利用してほしいのが、2階のレファレンスデスクだ。ここにはメディアセントラースタッフの他にも、平日の午後には学生のDB(データベース)コンサルタントが待機している。「相談に来る学生のなかには、同じ学生に相談するほうが話しやすいという人も多い。コンサルタントには『資料検索法』の授業課題を必ず解いてもらうなど、データベースに関する知識を積極的に勉強してもらっているんですよ」と湘南藤沢メディアセンター係主任の保坂睦さんは話す。レファレンスデスクではデータベースの使い方だけでなく、さまざまな相談に応じてくれる。たとえば、レポートをどう書けばいいか悩んでいるのならば、課題に関連した資料や調べ方についてアドバイスしてくれる。相談したおかげで視野が広がった、そこから答えに結びついたという学生も多い。「どんな多様なテー

#### ■アドバイスから開けるテーマ

ベースLexis.comだ。「JISはインターネット方式で利用が簡単ですし、メディアセンター経由で「Lexis社にお願いすると会社の人が来てくれて、データベースの使い方を教えてくれるサービスもあるから便利ですよ」と青木教授は語る。

マに対しても、効率的にデータを提供できるレファレンスデスクの方々のノウハウは本当にすばらしいと思います」。そう語る井下理総合政策学部教授は、研究会に所属する学生に、データベースをぜひ個人の研究に活用するよう指導している。そのため学期始めに開催しているデータベース・セミナーなどのイベントにも、積極的に参加するよう学生を促しているという。「SFCにおける学習は研究テーマを自分で見つけるところから始まります。だから、自分が興味を持ったテーマについて、まずは既存の研究を知ることが必要になります。レファレンスデスクのサービスを使いこなして、ぜひ自分の研究につなげてほしいですね」。

■生かされる学生の声

これらのデータベースにはどのよ  
うな導入基準があるのかを、保坂さ  
んに尋ねてみたところ、学生や教員  
の要望ができる限り反映するよう  
しているとのこと。「そのうえでど  
んな資料を取り入れるかを定めた蔵  
書構築基準に照らし合わせて導入し  
ていますね。この蔵書構築基準はメ  
ディアセンターのホームページに掲  
載されています。導入についての要  
望はもちろんですが、すでに導入さ  
れているデータベースについても改  
善してほしい点があれば、ぜひ教え  
てください。そういふた意見がきつ  
かけとなつて改善に至つた例は、今  
までに何度もあります」。

## ■マーケティングの発想

それでは、我々の要望はどのよう  
に伝えればいいのだろうか。レフア  
レンスカウンターで直接伝えてもか  
まわないし、メディアセンターのホー  
ムページ上にあるオンラインリクエ  
ストから質問や要望を伝えることも  
できる。このオンラインリクエスト  
を利用すれば、三田や日吉など他キャ  
ンパスから図書を取り寄せることが  
できるし、資料の購入依頼も可能で  
ある。「この文献が欲しい」という学  
生の気持ちがきちんと伝わり、メディ  
アセンターに置くのにふさわしいも  
のであれば、基本的にすべて購入す  
るようにしています」と木下さんは  
答える。そして、「学生からの声は、  
今どんな本が必要とされているのか  
を知る指標になります。実際のニー  
ズを知つてそれを反映していくため  
にも、ぜひ学生のみなさんにオンラ  
インリクエストのシステムを利用し  
てほしい」と付け加えた。

このよう<sup>に</sup>メディアセンターには充実したシステムとそれに対する手厚いサポート体制が整っている。それにもかかわらず、データベースや電子ジャーナルが学生に広く知られ、活用されているとは言い難い。それはなぜなのか。

第一の理由として、データベース自体の使いにくさが挙げられる。日本では、検索システムが海外のものに比べ洗練されていないし、データベースで何が調べられるのか、何が

それはなぜなのか。

標準化を図ろうという考え方でデータベースを提供する会社の間で育ちにくく、各社が独自に開発を進めている事情によるのだろうか。いずれにせよ、どのデータベースを使えばいいか迷ってしまう。インターフェース（ユーチャーとシステムとの情報伝達を仲介する規格）がきちんと整備されれば、グーグルのように一つのキーワードから欲しい情報を、複数のデータベースより得ることが可能になり、使いやすさが増す。そうすれば、専門領域が決まっていない学生でも、データベースを使うのが容易になるだろう。

第二に、メディアセンターと教員との連携が不十分であることが理由として考えられる。メディアセンターでは教員側の要望にあわせて授業や研究会に出張し、資料検索やデータベース利用についてのセミナーを開いている。メールやホームページなどさまざまな手段で告知を行なっているが、そういう制度があることを知らない教員が非常に多いという。「私たちからのアプローチがまだ不十分であるといえますね。積極的に、教員にメディアセンターにはこういう機能があるんだということを知りたいと思います。決定的な効果を生み出すためにもメディアセンターにマークティングの手法を取り入れていくことが必要と考えています」という保坂さんの言葉のとおり、メディアセンターでは学生や教員の研究、学習を助けるさまざま機能について、さらなるアピールを



レファレンスデスク



## データベース検索コーナー

考へている。井下教授も「ユーチャーの立場に立ったサービスをしていくには、メディアセンターがいかにマーケティングの発想を持つか」ということが重要です。ユーチャーがいつ、何を必要としているかがわかれれば、豊富なデータベースが宝の持ち腐れになることを防げると思います」と提案している。

### ■誰もが快適でいられる場所を目指して

では、我々はどのようにこれらの機能を使いこなしていくべきだろうか。

「大学は知的に遊ぶことのできる最後の時間」と言う市古講師は「メディアセンターのサービスを利用することで、信頼できる情報、信頼できない情報の判断ができるようトレーニングをして、批判的に物事を考える力をつけてほしい」と話す。一方、保坂さんもデータベース利用にあたつて重要な注意点を教えてくれた。「大切なことは自分が何を知りたいのか、という要求を明確にすることです。自分のなかで探したいものを明確にして、それを探すテクニックを身につける。そうすれば、今までよりもずっと時間を短縮して、質の高い情報を得られると思います」。

多くの人のニーズに応えられるもの用意すること、そして誰もが快適に過ごせる場を提供することがメディアセンターの任務であり、そのためには学生にも協力してほしいと

木下さんは言う。「学生のみなさんは、自分の行動が周りの迷惑になつていなかどうか意識してほしい。お互いの気を使い合つことで、メディアセンターの環境はますます良くなつていくと思います」。

2006年夏にメディアセンターのホームページはより使いやすくリニューアルされる。学生からの要望を取り入れやすくし、メディアセンターの改善につなげていきたいといふ。日々進化を遂げていくメディア知識の倉庫ではなく、泉のような場所なんです。知的営みのセンターだからこそ、キャンパスの中心に位置しているんですね。ここは、時間をかけて思いきり調べ、考えるという知識的な作業を通して、大学生がより大学生らしくなつっていく場所だと思います」。

「メディアセンターからどんどん知識や情報を吸収し、何を研究や学習に生かしていくのか。その選択を行なうのは私たちである。それぞれのより深く、より質の高い学習のために、メディアセンターの活用について改めて見つめ直してみてはいかがだろうか。

(文責: KEO SFC REVIEW 編集委員)

## 蔵書統計

	単行本 (冊)	データベース (ファイル)	電子ジャーナル (タイトル)	電子ブック (タイトル)
三田メディアセンター	1,847,792	187	19,066	1,627
日吉メディアセンター	602,734	98	18,874	1,627
信濃町メディアセンター	107,100	76	20,848	1,637
理工学メディアセンター	125,400	82	20,033	1,627
湘南藤沢メディアセンター	258,149	113	21,030	1,957

(2005年10月現在)

# SFCのこれからを考える

第8回 若手教員に聞く 西山朗（総合政策学部専任講師）

## 無敵・素敵・SFC

これまで幾度となく語ってきた「SFCらしさ」や「これからSFC像」—それらを分析し、SFCのこれからを語るための新鮮な視点を提示する。今回は西山朗総合政策学部専任講師に話を聞いた。



——SFCに来るまでの経緯を教えてください。

日本で大学院修士課程を卒業しましたが、どうしても自分の勉強してきたことに納得できなかつたんです。そこでもう一度ゼロから経済学を勉強するためにイギリスに渡り、ノッティンガム大学の大学院で勉強しました。帰国後に中部大学で、主に1年生を対象とする経済学の基礎を教えていたときに、ちょうどSFCの教員公募情報を見たんです。日本をリードしているといった過言ではないSFCならば、やる気のある学生が多いだろう想像していたので、ぜひSFCで教えたいくらい応募しました。予想以上にボテンシャルが高い学生が多く、教員としてやりがいや充実感を日々かみしめています。

——他の大学に比べて、SFCの良い点と悪いのはありますか。

SFCには優れた制度がたくさんありますよね。SFC-SFSはその典型で、教員にとっては通信簿のようなものです。学生からの評価がSFC全体に公表されることには緊張しますが、学生が教員に刺激を与えるこのような制度が整備され維持されていることは本当にすばらしいですね。でも、内容に関しては物足りない気もします。たとえば、「この講義を履修してよかつたと思いますか」という設問に対して、選択肢が「はい／いいえ」の二択しかない点は、改善する必要があると思います。「履修してよかつた」という回答をしても、「大満足」という高い満足度もあれば、「まあまあ良かったけど……」という低い満足度もあるでしょう。でも、現状のSFC-SFS

では、その満足度の差異を表すことができないわけです。5段階評価か10段階評価にすべきですね。より詳細に学生の満足度を把握することができるよう、そういった点を改善していくべき、さらに実りあるシステムになると思います。

SAというシステムも、SFCが他の大学に誇れるものです。SAの役割は、単に授業の手伝いをすることではなく、教員をしっかりサポートして一緒に授業を作り上げていくことだと考えています。学生にSAの仕事をお願いするときには、やる気と能力を兼ね備えた人材をとても慎重に選んでいます。SAには僕の講義の改善点を指摘してほしいので、「アルバイト感覚ではやらないでね」と繰り返しているのです。僕の講義を担当しているSAは、僕と一緒にになって講義や研究会を作り上げていくことで、も

——逆に、SFCに足りない点はどこでしょうか。

僕の研究会では、開発経済学を学生と一緒に学んでいます。これは、どうすれば貧しい国々の貧困を撲滅できるのかを研究する学問です。僕はSFCが掲げている「問題発見・解決型」という理念が大好きなので、実際に研究会でもこの理念を実践しようと努力しています。でもこの理念は、單純に言葉通りに受け取っては不十分だと思うんです。

たとえば、アフリカの貧しい村に、日本の小学生が訪れたとしましょう。貧しい村の人たちが着ているボロボロの服を見て、「これ村の人たちは、きれいな服も着られないくらい貧しいのだ」と。そしてその問題を「解決」するために、「みんなで服を

たくさん送れば、この村の人たちはきれいな服を着られるね」といつた政策提言もで

——研究会のホームページでは、いろんな本を紹介されていますね。

そこで「問題分析」というプロセスが重要になります。問題の解決方法がその社会にとって有用か否かは、その方法が問題の核心をえぐり出しているか、正しい分析に基づいているかにかかっています。正しい分析を行なうことで初めて、その問題に真正面から向き合えるからです。だか

読書はとても重要です。本を通して、世界の偉人の考えに直接触れることができるからです。本を読み、今まで知らなかつた世界を発見したり、自分自身が世界のなかで今どのようなポジションにいるのかを再認識したりする。そうすると、社会にはどのような問題が存在していて、自分がその社会のなかでどういった役割を担いたいのか、担えるのかが、自ずと見えてくるはずなんです。

を育てたい」という想いから僕が考えた造語です。僕はいつも「僕が発した言葉をオウムみたいに繰り返す人材は育てない」と話しています。何が正しくて何が間違っているか自分で見極めることができるセンスや感性、そして何よりも思考能力を育てたいと思っています。自分の専門性を大切にしつつも、いくつもの有用な分析視角や価値観を持つていて、さらにそれをTPOに合わせて使い分けたり複合的に判断したりすることができる人材。これが僕の育てたいと考えている「Balanced Specialist」です。

——最後に、これからSFCはどうあるべきでしょうか。

ら学生には、統計学や理論に関する講義をたくさん履修して、分析能力を身につけてほしい。たとえば統計学は、自然科学から社会科学にまで広く使用される分析手法ですからね。SFCが掲げている「問題発見・解決型」を実現し、意味あるものにするためにも、正しい「問題分析」ができるようになってほしい。すなわち、「問題発見・解決型」ではなく、「問題発見・問題分析・解決型」こそが、SFCが進むべき次のステージであり方向性であると思います。

SFCの学生は、研究に直結する本はとても熱心に読んでいます。でもそれ以外の本はあまり読んでいない。たしかに一つの分野を究めていくことも重要ですが、学生時代には自分の世界観を広げることが大切です。たとえば、小説を読むとあなたの人間性を高められるし、評論では社会について考える能力を養えます。視野の広い「Balanced Specialist」になるためのトレーニングとして、学生には自分の研究と関連しないような本を一冊でも多く読んでほしい

——最後に、これから的是非とはどうあるべきでしょか。

この「Balanced Specialist」の用語は、「バランスの取れたスペシャリスト」といふね。

だからこそ、「新しさ」のなかに安住することは、「古さ」のなかに埋没することと同様に無意味であることを常に意識すべき

A black and white portrait photograph of a middle-aged man with dark, wavy hair. He is wearing a dark suit jacket over a white collared shirt. The photo is set against a plain, light-colored background.

西山 朗

（にじょ めうり）  
総合政策学部専任講師。  
1998年英国・ノッティンガム大学経済学部大学院修士課程、2002年同大学院後期博士課程を卒業、Ph.D.取得。2003年中部大学非常勤講師を経て、現職。専門は経済成長論、マクロ経済学、開発経済学。主な担当科目は「マクロ経済学」「マクロ経済政策」など。

きでしよう。「目新しさ」を追求すること、自体が決して目的化することのないよう、「社会問題私たちは注意深くあるべきです。」

SFCには、そのような繊細で難しい舵取りをこなしていく力があります。開拓者精神や社会への強い問題意識を維持しつつ、社会をきちんと分析できる能力を身につける。新しいとか古いとかに関係なく、既存の学問が有している確固たる専門性など、良いところを貪欲に吸収する。そうすれば、SFCは無敵です。それらを達成できれば、SFCは名実ともに、日本を、そして世界を代表するキャンパスになるだろうと思います。

たわけです。  
だからこそ、「新しさ」のなかに安住することは、「古さ」のなかに埋没することと同様に無意味であることを常に意識すべ

# KEIO SFC REVIEW No.30

## 編集長

小杉 崇文 (環境情報学部3年)

## 副編集長

馬越 初美 (総合政策学部3年)

中牧 莉香 (総合政策学部2年)

## 編集委員

百谷 伶奈 (総合政策学部4年)

中澤 仁美 (環境情報学部4年)

石関 美実子 (環境情報学部3年)

小野島茉莉 (総合政策学部3年)

神谷 健 (総合政策学部3年)

佐々木綾香 (総合政策学部3年)

田中 康範 (総合政策学部3年)

西浦 華織 (総合政策学部3年)

隈田原幸大 (環境情報学部2年)

戸本 真由 (総合政策学部2年)

坂本 茜 (環境情報学部2年)

河野佐和子 (環境情報学部1年)

柴 光則 (総合政策学部1年)

田中 舞 (環境情報学部1年)

力石 大輔 (環境情報学部1年)

松原 真倫 (総合政策学部1年)

## 付録 模型

HAL-CURATION

(稻葉佳之+坂口祐)

## 湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW担当

堀 茂樹 (総合政策学部教授)

## 事務局

田坂 真美

## 編集後記

デジタルか紙媒体か。最近よく新聞のウェブ化といった話題が取り上げられる。SFC生のなかにも、WEBを利用して情報を得る人が多い。そのような状況において、紙を媒体とする『KEIO SFC REVIEW』は今後どのように変わっていくべきなのだろうか。今号で『KEIO SFC REVIEW』も30号という区切りを迎える。しかし、まだまだ学生間における知名度や、読者層の薄さなど問題は多い。変えていかなければならないところ、今のまま残すべきところをしっかりと見つめ、SFCの活動を広く伝えていきたい。

SFCは未来を創る大学とよく言われる。雑誌編集にあたっても感じることだが、自分がやっていること、作っているものの良し悪しを判断するのは難しい。人に言わなければ気づけないことが多い。『KEIO SFC REVIEW』がSFCの広報をするだけでなく、批判することにより、SFCに良い影響を与えることができたらと思う。また、『KEIO SFC REVIEW』も読者の方々の言葉にしっかりと耳を傾け、より良いものにしていきたい。

『KEIO SFC REVIEW』での取材には、自分の専攻する分野以外の取材も多くある。普段触れることがない学問分野に触ることはとても刺激的であり、ためになる。読者のみなさんにも、興味のない分野の記事を読んでいただき、その分野に少しでも興味を持っていただけたら幸いである。

30号編集長 小杉 崇文

2006年07月30日 発行

発行人 徳田 英幸

発行所 慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県 藤沢市遠藤5322

Tel 0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

[gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

バックナンバー・年間購読をご希望の方は  
ご連絡ください。

制作・印刷 株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県 藤沢市石川6-26-19

Tel 0466-87-5811

Fax 0466-88-6560

<http://www.printpia.co.jp/>

T E L ☎ 0466-49-3437

F A X ☎ 0466-49-3594

MAIL ☐ [gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

年間購読料は手数料を含め、合計1,800円です。

年間を通じて購読されますと200円の割引となります。

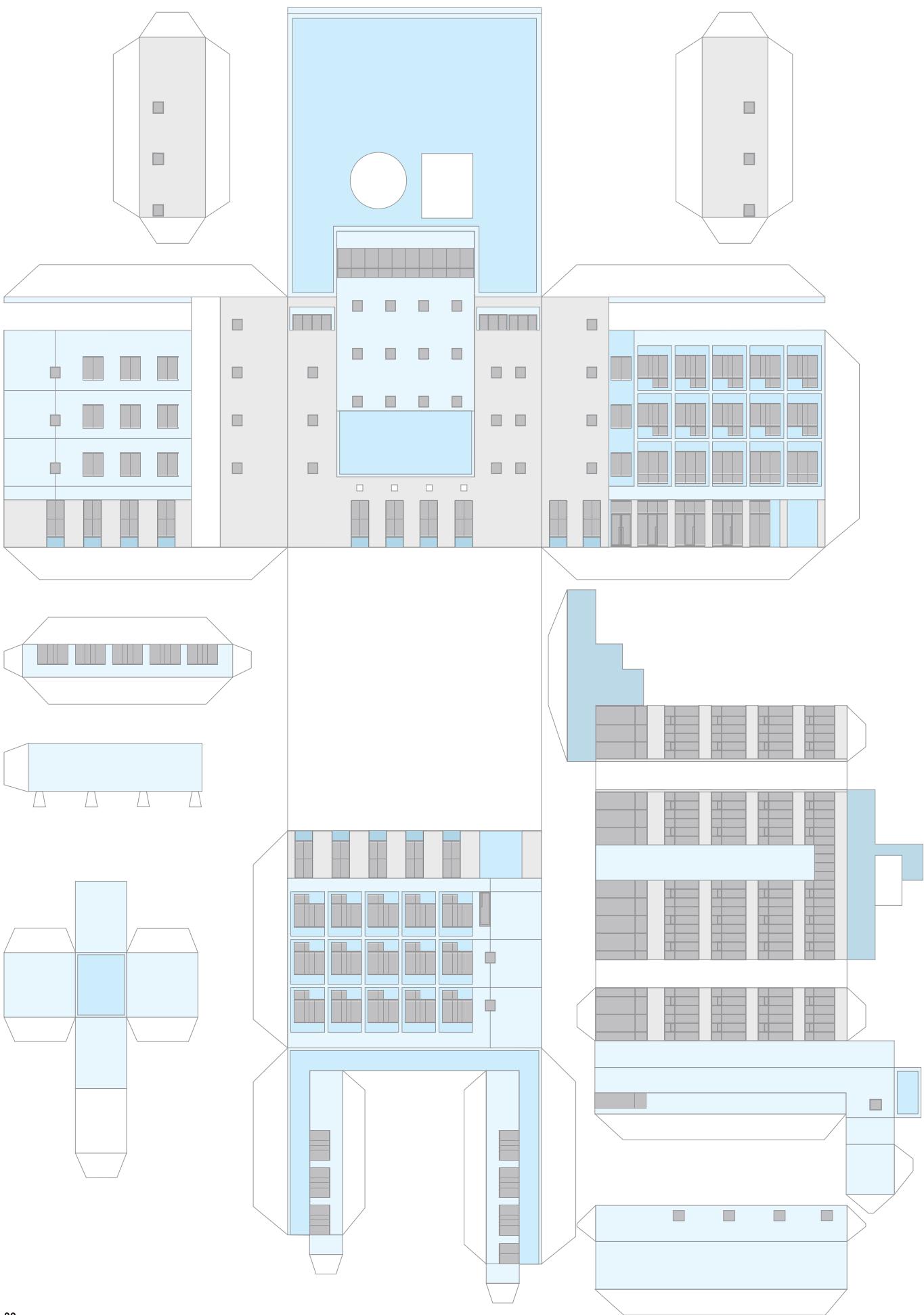
発行回数は年4回を予定しています。

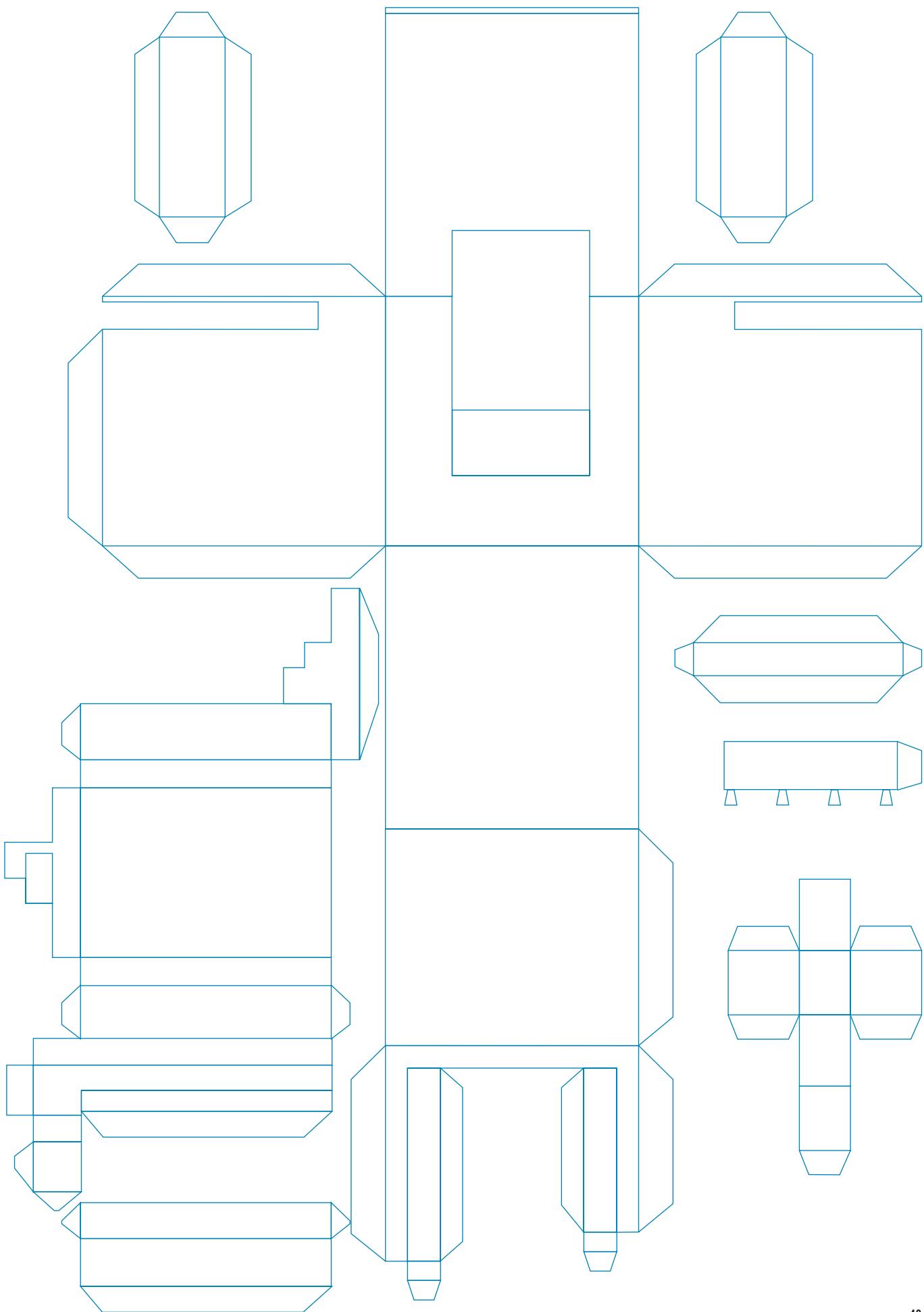
■ 無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

# make your campus

20c(イオタ)高層棟







**KEIO SFC REVIEW No.30**

**湘南藤沢学会 2006.07.30**

**ISSN 1343-3318 定価 300円(消費税込)**